

団長の心のものさし

しのぎを削る
優れた合唱団
歌うだけ!?

なんて津は唐い街なんだ

2日、津市内で2つの合唱団の演奏会がダブル開催された。三重バッハ合唱団とヴォーカルアンサンブルESTだ。バッハ合唱団はバッハを中心にこだわりの作品を演奏し続けている。ESTは今や国際的にも注目される旬な合唱団。それぞれに趣は異なるが、聴き応えのあるプログラムとそれを表現する力量のある合唱団だ。

バッハ合唱団は、数年前から若手(?)で大活躍中の合唱指揮者、本山秀毅氏が指揮者として迎えられているが、本山氏のその音楽性が見事に反映された好感の持てる演奏だった。躍動感やメリハリの利いた、飽きの

来ない印象。今回はバッハ作品ではなく、ヘンデルの“エジプトのイスラエル人”。古い作品だが非常にポップに聴こえるのは作品のカラーだけではないだろう。月一回の練習を基本とした活動だけに、未消化な箇所もあるが、音楽の勢いが失せないのは氏の導き方の成せる業だろう。ライブ感があると感じた。また、こうした隠れた秀作を紹介してくれることも、合唱ファンには嬉しく有り難いところだ。

ESTは、古今東西の作品をふんだんに散りばめた豪華仕様。ESTはルネッサンス時代の古い作品演奏を標榜していた合唱団だったと思うが、現代作品が圧倒的にフィットすると感じた。難曲中の難曲を精巧に研ぎ澄まされた演奏で聴かせる。これだけの演奏はそう聴けるものではないだろう。ただ、声を出すという発声意欲は十分すぎるほど見えるが、歌うという歌唱意欲がそれに比べると弱く聴こえるのが残念だ。声が強すぎて表現が隠れてしまってい



メリハリのある素晴らしい演奏する三重バッハ合唱団

るともいえよう。この点が、難曲の多い現代作品では一応の功を奏しているのだろう。好みの問題はあるとしても、これは惜しいと感じた。

この小さな津の街に、これだけの

客席で応援をする姿勢

合唱活動を展開している合唱団が、この2グループ以外も含め多数存在していることは奇跡的だ。合唱団はその活動の中でそれぞれの特徴をしっかりと見せている。ゆえに一見盛んそうに見える津の合唱界だが、見方を変えれば、お互いに相容れない合唱団がしのぎを削っているとも言えよう。粗っぽい表現をすれば、仲が良くないのである。少なくとも仲良くしようという姿勢は現実的には見えない。それを物語るかのように、客席でそうした合唱団のメンバーの姿が見られることは少ない。うたおにのメンバーも見ることが少ないのは残念だ。

演奏が舞台上だけで成り立つことはない。演奏者と聴衆がいて初めて成り立つことは知っているはず。なぜだろう? どうして客席に回れないのだろうか? 自分たちのやっている内容が、どこの合唱団よりも楽しいことは歓迎できるし、そうあって欲しい。しかし、同じ志をもつ仲間を応援せずして、合唱活動といえるのだろうか?

私たちはチケットを売る。聴き手が必要だからだ。聴いて欲しいからだ。伝えたいからだ。その思いを知っていれば、聴衆になることは率先すべき態度だ。自分たちの演奏活動に次ぐ重要なことだと思う。逆もまた真なりだ。演奏するということ、もう一度考え直す時期に来ていると常々感じている。

優れた合唱団という恵まれた財産が津にはすでにある。あとはそれを心の目で見守る聴衆(ファン)が増えることだ。うたおにの立場から言えば、よその合唱団がどうするかなどは二の次だ。まずは、うたおにのメンバーは素晴らしい合唱ファンであって欲しいと願うだけだ。

論語の「和して同じず」という言葉が、私たちがすべき姿を現してくれていると思うのだが…。

うたおにの5月6日(木)の様子

練習内容

「Zigeunerlieder」より

He! Zigeuner!
Hochgeturmt Rima-flut
Himmeligabes Liebe
Heiligem Eide
Gute Nacht!
Meine Abendstern
Abendwolken

「ジプシーの歌」は基本的に毎回一曲かな」とか言っておきながら。ハイペース?でも短いし、不得意なジャンルではあるけど、よく歌ってくれているから。新人さん、ごめんね。特に言葉の問題ね。そのうち喋れるようになるから。赤ちゃんでもそうでしょ?なんて楽天的!それがすべてだよ!早く9月の音楽会のプログラムに突入しないといけないしね。